藏王絶唱

諸星澄子

藏王絶唱

諸星澄子

立風書房

蔵王絶唱
著者＝諸星澄子
発行者＝下野　博
発行所＝株式会社立風書房
東京都大田区南千束一―一二―四
電話＝東京（七二七）一一〇一～八
振替＝東京七四四九三
印刷所＝江戸川印刷株式会社／株式会社美術版画社
製本所＝ナショナル製本
定価＝三八〇円
（乱丁本・落丁本はお取替えいたします）　〇〇九三―三一〇〇七―八九〇九

目次

蔵王絶唱……5
冬の夜の追想……177
ダイヤの首飾り……201

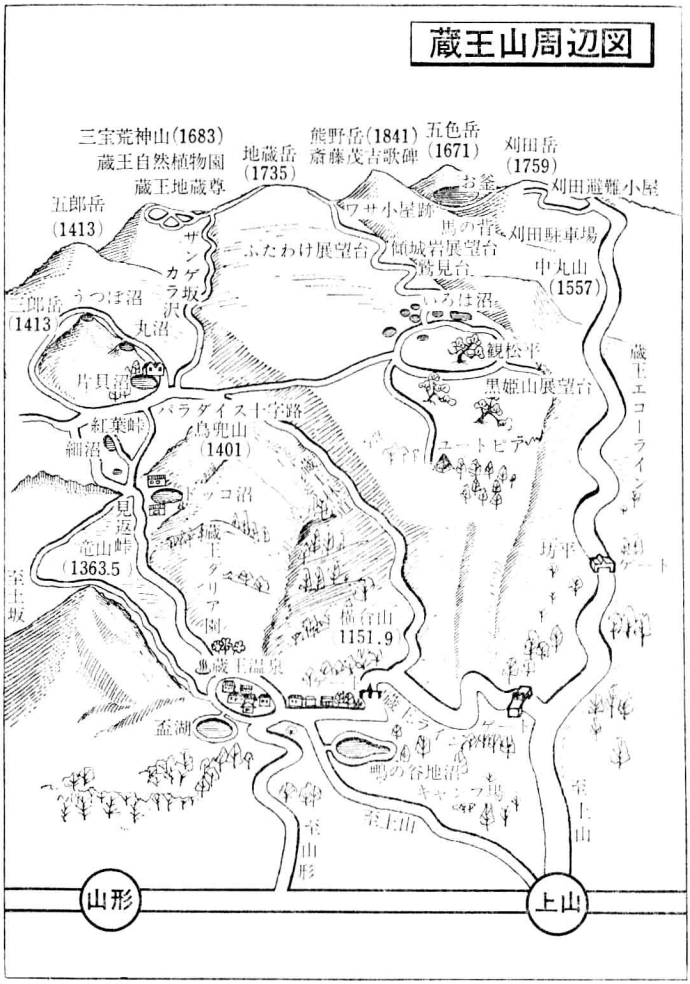
装　幀　佐藤忠良

口絵写真　三木慶介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

藏王絶唱

蔵王山周辺図


三宝荒神山(1683)
蔵王自然植物園
蔵王地蔵尊
地蔵岳
(1735)
熊野岳(1841)
斎藤茂吉歌碑
五色岳
(1671)
刈田岳
(1759)
お釜
刈田避難小屋
五郎岳
(1413)
ワサ小屋跡
馬の背
刈田駐車場
サンゲ坂
ふたわけ展望台
御城岩展望台
鷲見台
中丸山
(1557)
カラ沢
五郎岳
(1413)
うつぼ沼
丸沼
いろは沼
観松平
蔵王エコーライン
片貝沼
黒姫山展望台
パラダイス十字路
紅葉峠
細沼
鳥兜山
(1401)
ユートピア
ドッコ沼
見返峠
(1363.5)
蔵王ターリア園
坊平
ゲート
至上坂
備谷山
1151.9
蔵王温泉
盃湖
明の谷地湿
キャンプ場
至上山
至上山
至山形
山形
上山

一

山形県立山形千歳高校。

山形市の東南、国道十三号線バイパスと、馬見ケ崎川との交差するあたり、緑の濃い丘陵地に建てられていた。

背後に校名の由来である千歳山を背負い、なおその奥深く、蔵王国定公園の幾多の連峰をひかえている。

山形市にかぎらず、この地方きっての名門校であった。

美しい自然に恵まれた環境にありながら、ここにもまた受験の嵐が吹いていたのだ。

十月なかばのある日のことである。

三年生の過半数を占める受験組に対し、模擬テストが行なわれ、いま、ちょうどその成績が発表されたところだ。

廊下の壁面にはり出された成績表の前に、人が群れたかり、殺気がたちこめていた。

三年二組、吉井千佐子は人びとの群らがる廊下の手前まできて、足をとめた。

千佐子もまた、ほんの三月前までは、胸とどろかせて一覧表のなかに自分の名前を捜したひとりだった。受験組にはいり、そのつもりで頑張ってきた。だが、ある事情から受験を断念してからは、この模擬テストを受けることもなくなってしまった。

はっきりと、心にきめたことだから、後悔はしていない。卒業後は市内の銀行に就職することになると、ほぼ内定していた。

けれども千佐子は、そのテスト結果が見たかった。自分は受けていないが、そのテストを受けたはずの、ある人の成績を知りたいのだ。

うしろのほうで待っていると、じょじょに人垣が崩れ、少しずつすいてきた。千佐子はひかえ目にのぞきこむ。自分に関係ないことに興味を持つのがためらわれた。

が、就職のきまった千佐子が、テスト結果を見ることに抵抗をおぼえるほど、人びとは気にしない。人のことなど眼中にないのだ。ただ自分の成績、そして自分より順位が上のものの成績だけが彼等の関心の対象である。

千歳エゴイスト――そうひそかに呼ばれるような連中が、この学校には多いのだった。

坂本隆治――。

千佐子はその名をさがした。順位の一番からすばやく視線をはしらせる。

順位九番、四百点満点で三一五点だ。前のテストが七番だったから、またすこし落ちている。

こんども一位は田辺知行だった。総合点三六九点ととびきりいい。千歳エゴイストの代表者のような田辺なのだ。

それだけを目にいれると、千佐子は人垣からぬけ、ゆっくりと歩いた。

――隆治さん、東北大に受かるかしら？

受かってほしい、と強く願う。坂本隆治の第二志望は東京の私大だった。もし、隆治が東京の大学に進むことになれば、千佐子とは遠く離れてしまう。仙台ならば、この山形から通うこともできる。たとえ下宿したとしても容易に帰って来られる。

しかし、千佐子が隆治を東北大に合格させたいのは、そんな自分の喜びのためではなかった。もっと純粋なものだ。隆治が東北大を第一志望とし、その合格を願っていることを知っているから、彼女も願う。愛する人のために、それを願う。

千佐子は隆治への愛を胸に秘めていた。しかし、それはまだ一度も口にしたことはないのだ

った。

教室にはいる。廊下にあった殺気は、ここにも持ち越されていた。千佐子はそれがこのごろのくせで、なにげない様子で隆治の席を見る。隆治が机の上にひろげているものは、学級日誌らしかった。隆治は学級委員なのだ。

この学校では、二年になるともう学級委員の引き受け手がない。人のめんどうまで見られるかというわけである。そんなことは暇人にまかせろと露骨にいうものさえいる。

しかし、隆治だけは違った。二年のとき組がえがあって以来、ずっとこの二組の学級委員長をしている。いやな顔ひとつ見せなかった。千佐子はずっと、補助役の副委員だった。それは名コンビだといって、クラスの人たちがふたりに押しつけたものだが、千佐子はあえてさからわなかった。なるべく隆治の負担を軽くしてあげようと、彼女なりに勤めてきたはずだった。そして千佐子が進学を断念してしまった時からは、すべての雑用は自分が一手に引き受けようと心がけていた。隆治のだいじな勉強の時間を、少しでも奪いたくなかったからである。

だから、いま、千佐子は隆治が学級日誌を机に出しているのを見て、急いでそばに寄っていった。

「坂木くん、学級日誌、あたしが書くわ」

「あ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

隆治はおだやかな目をむけた。

「いま、ちょうど書き終えたところだ。なにか補足するところがあったら頼むよ」

千佐子は隆治のおだやかな目に、わけもなく安心する。学級日誌を手にすると、自分の席についた。

すぐ、隆治の記述を読まずにはいられない。隆治は書いていた。

きょう、昼休みに、このあいだの模擬テストの結果の発表があった。みんなの目が血走っていた。上がったものもいるし、下がったものもいる。一喜一憂している自分たちが、ちっぽけで、みじめな存在に思える。ぼくは再び問う。青春とはなんなのだ。大きな困難＝入試、を克服することも青春のエネルギーにはちがいない。しかし、それだけでいいのだろうか。なにか、もっとだいじなものをぼくたちは忘れていはしまいか。クラスのことに、あまりにも無関心な人びと。しかしぼくはその人たちを非難することはできない。ぼくもその一員なのかもしれないのだから。

千佐子は万年筆をとると、そのあとへ、続けて書いた。

青春のカンヅメというものを考えています。どこかにそういうものを売っていないでしょうか。青空や、夢や、ほほえみや、小川のせせらぎや、美しく鳴る音楽や、愛情、優しいことば、そんなものがぎっしりつまっているカンヅメ。受験勉強で疲れているみなさんに、そんなカンヅメを一つずつプレゼントしてあげたい。夜遅くまで勉強している机の上に、カンキリといっしょにそっとのせてあげたい……みんなが苦しいのだと思います。もう一息です。がんばってください。

千佐子は学級日誌を、教室後方の壁面に打たれている釘に、そっとつるした。クラスのだれもが目を通すことになっている学級日誌である。書きたいものは、書きたいときに何を書いてもいいことになっている。けれど、このところずっと、隆治と千佐子以外に日誌に記述したものはいない。

きょうの隆治と千佐子の記述にしたところで、はたして何人のクラスメートの目に触れるであろうか。

午後の第一校時は数学であった。三年二組はそろって「数Ⅲ」である。

数学の教師は鈴木泰邦先生である。クラス担任でもあった。

「なんだ、その不景気な面は」

教壇に立つとすぐ鈴木先生はいった。
「わかった。原因はあの模擬テストだな」
だれもこたえるものはいない。
「はっはっは、なにをいまからクヨクヨしとる。模擬はあくまで模擬であって本番じゃないぞ、まだ三月以上もある。元気を出せ」
先生はにこにこしながら大きな声でいったが、これに対して笑顔でもってこたえる生徒はいなかった。
そのとき、急に鈴木先生がいい出したのだ。
「よう、こんどの日曜、蔵王へハイキングに行かないか。たまには息抜きも必要だぞ。天気がよかったら行こう」
先生はそういうと、にわかにこの思いつきに興がのったように、
「朝七時。山形駅の蔵王温泉行きのバス停に、希望者は集まれ。歩いて地蔵岳(じぞうだけ)まで登る。強制はしないが、気が向いたら来いよ」
即断、即決で生徒間に信望のあるこの二十九歳の青年教師は、そういうと、教室をみまわし、ひとりの生徒に目をとめた。
「おい、坂本、おまえ、行くか?」

千佐子はうしろの席にすわっている隆治が、このときどんな表情を見せたかを知ることはできなかった。しかし、

「はい、行きます」

しっかりした返事がかえってきた。

「よし。じゃ、おまえリーダーになってくれ」

「はい」

すぐに授業がはじまった。

十月十七日、日曜日。三年二組の蔵王ハイキングはこうしてきめられたのである。

が、だれとだれが参加するのか、その段階ではまだ皆目、けんとうもつかなかった。

二

「じょうだんじゃないぜ。日曜日を一日、ムダにできるかい」

「骨折り損の、くたびれもうけさ」

「このさい、日曜を丸一日ってことになると、でっけえからな」

「いったい、本気で行くやつがいるのかね」

そんな私語（ささやき）の聞こえるなかを、坂本隆治（さかもとりゅうじ）が立ちあがった。授業が終わってからである。

「みんな、趣旨はわかったと思う。先生もいわれたとおり、これは強制すべき事柄じゃあない。行きたいと思うやつだけ、集まってくれたらいい。少しでも気が進まないものは、やめたほうがいい。無理することないんだぜ。——それから、簡単なハイキングだから、重装備は要らない。軽い気持で、来れるものだけ来てくれ」

いうだけいうと、隆治はさっさと席についた。

日曜日まで、あと三日あった。

坂本隆治はスランプに陥っていた。自分だけの時間表をつくり、それにのっとって夜遅くまで勉強しているのだが、自分でももどかしいと思うほど、頭が冴えなかった。きょう発表された模擬テストの結果も、あんのじょう、いいものではなかった。これではいけない。スランプを克服するのは、やはり自分の力以外にありはしない。やりぬくぞ。彼はそう決心したばかりであった。

だから、鈴木先生からいきなりハイキングの話を持ち出され、行くかと聞かれたとき、多少のためらいはあった。次の日曜日の時間割りが瞬間さっと頭にひらめいたのである。

が、彼は行くとこたえた。はっきりと返事をした。

そして隆治のあたまに、吉井千佐子の顔が浮かんだ。このハイキングをきっかけとして、ス

ランプから脱出できるかもしれないという希望が湧いた。
しかし、彼はみんなには慎重なしゃべり方をした。受験に目の色を変えている連中はきてくれないだろうと思った。それでもいいと思った。無理に誘ってはいけない。そのかわり、集まってきた連中とは、最高に楽しく過ごせそうだった。いや、ぜひとも楽しい一日にしなければいけない。彼はそう期待した。

吉井千佐子は困惑していた。鈴木先生のとつぜんの提案があったあとで、隆治がリーダーに決定した。
放課後、隆治が千佐子のもとへやってきた。
「吉井さん、きみ行くだろう？」
「坂本くん」
千佐子は押しかぶせるようにいった。
「あなた、都合、わるいんじゃないの？　ね、リーダーはあたしにだってできるわ」
「吉井さん、きみ、なにか思い違いしてるんじゃないかい。そんな心配なら、無用だぜ、ぼくは、行きたいから行くんだ。強制されて行くわけじゃない」
「じゃ、ほんと、なのね？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c